

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 27 年 5 月 14 日現在

機関番号：13301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2012～2014

課題番号：24720151

研究課題名(和文) 20世紀ベルリンにおける社会主義児童文学の歴史の変遷に関する研究

研究課題名(英文) A study of the historical development of the socialist children's and youth literature in the 20th century Berlin

研究代表者

佐藤 文彦 (Sato, Fumihiko)

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：30452098

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では1920～30年代のプロレタリア革命童話を出発点に、戦後、東ドイツにおいて社会主義児童文学が形成・展開するさまを分析した。その際、とりわけアレックス・ウェディング(1905-1966)の文学活動に注目し、彼女の代表作『エデとウンク』(1931)が果たした役割の大きさを指摘した。具体的には、ケストナーの影響下でありながらも、市民階級ではなく、労働者世界や都市の周縁部に生きるロマの子どもの生活実態を詳述している点に、社会主義リアリズム(児童)文学の萌芽を見て取った。

研究成果の概要(英文)：This study analyzes, how socialist children's and youth literature, which started from the proletarian-revolutionary children's and youth literature of the 1920s and 1930s, has formed and developed in the GDR after World War II. In this context Alex Wedding (1905-1966) and her literary work is of particular importance, because her debut novel "Ede und Unku" (1931), though written under the influence of Kaestner, described in detail not middle-class children, but working-class children and Sinti-children on the outskirts of the city of Berlin, what can be regarded as the seed of the later developing socialist-realistic children's and youth literature.

研究分野：近現代ドイツ・オーストリア文学

キーワード：ドイツ文学 児童文学 社会主義文学 旧東ドイツ ベルリン

## 1. 研究開始当初の背景

1933年から1945年にかけてのいわゆる亡命ドイツ文学に関する研究は、ドイツ国立図書館が継続的に文献を収集するなど、ドイツ本国においてはかなりの蓄積が認められる。それに対し、相当数の亡命作家たちが亡命前の1920年代から1930年代前半にかけて母国で取り組んでいた社会主義文学、あるいはその一ジャンルとしてのプロレタリア児童文学に関する関心は、今日、亡命文学ほどに高いとは言えないのが実情である。また、彼らの戦後の創作活動においても、戦前のプロレタリア児童文学の痕跡や歴史の変遷を追う試みは皆無である。

本研究において考察の主たる対象となったアレックス・ウェディング (Alex Wedding, 1905-1966) は、1933年にニューヨークへ亡命する直前の1931年、プロレタリア児童文学の作家としてベルリンでデビューした。戦後、夫のF. C. ヴァイスコプフ (Franz Carl Weiskopf, 1900-1955) がチェコスロヴァキアの外交官になったため、ウェディングはワシントン、ストックホルム、北京に滞在する。そして彼女がふたたび東ベルリンに戻ったのは、1953年のことだった。西側の体制をも見たのち、敢えて東ドイツに戻ったこの人物に関する研究は、再統一後のドイツではほとんどなされていない。消滅してしまった国の消滅してしまった文学を象徴する作家のひとりとして、いまや忘却の闇に葬り去られてしまったと言えるだろう。

しかし今世紀に入り、彼女の祖国オーストリアの若手研究者たちが、ウェディング再発見に取り組み始めた。その成果は2007年、ウィーンのプレゼンス社から *Alex Wedding (1905-1966) und die proletarische Kinder- und Jugendliteratur* としてまとめられた。おもにウィーン大学出身のメンバーから成るこのグループの研究スタンスは、ウェディングを単に旧東ドイツの児童文学者として片付けるのではなく、彼女がすでにジャーナリストとして活動を開始していた1920年代から亡命中および国外滞在中の30~50年代初頭の活動をも視野に入れることで、両大戦間期ベルリンで成立したプロレタリア児童文学が、その後、ナチズムと東西ドイツ分断を経て、いかなる変遷を遂げたのかについて検証することであった。ウェディング再発見のみならず、20世紀ドイツ社会主義児童文学史の書き換えにも迫ろうとするこの大胆かつ斬新な研究姿勢を高く評価する本研究の研究代表者は、本研究もまたこの流れに沿った形で行なうことを目指した。

社会主義児童文学の研究を旧東ドイツの枠組みに固定するのではなく、時間的には両大戦間期プロレタリア児童文学にさかのぼって行なう点で、また、空間的にはウェディ

ングが滞在し、彼女の創作活動にも取り入れた同時代の中国の動向も視野に入れる点で、本研究の独創性は発揮されるであろうという期待は、研究開始当初から抱いていた。

## 2. 研究の目的

本研究の最大の目的は、20世紀ドイツ語圏、とりわけベルリンにおける社会主義児童文学の変遷について、その萌芽である1920年代のプロレタリア児童文学から、戦後、ベルリンを含むドイツ東部に社会主義国家 (ドイツ民主共和国、1949-1990) が誕生し、国家の指導と監督のもと、社会主義児童文学が形成され、発展していくその実態を解明することであった。

具体的には、このジャンルの代表的作家、アレックス・ウェディングの文学活動について、1930年代のプロレタリア児童文学の執筆から、1950~60年代の東ドイツにおいて社会主義児童文学の発展に積極的に寄与するまでの歴史的展開を明らかにすることを目指した。なぜなら、ベルリンで始まり、亡命という名の中断期間を経て、ベルリンで終わるウェディングの文学活動の軌跡は、プロレタリア児童文学から社会主義児童文学へ、というこのジャンルの歴史の変遷と軌を一にしており、20世紀ベルリンの社会主義児童文学史を概観する本研究にとって、理想的なケース・スタディとなり得ることが予想されたためである。

ウェディングという作家の変化・成長を追跡することで、両大戦間期ベルリンで成立したプロレタリア児童文学が戦後、東ドイツの社会主義児童文学へと発展・変容するさまを確認し、20世紀ドイツ社会主義児童文学史の新たな記述を目指すことが、本研究の目的であった。

## 3. 研究の方法

文献学に基づいた作家・作品研究であるため、主たる方法としては、テキストを読み込む内在解釈を採用した。しかし、そもそもウェディングの作品 (一次文献) を体系的に所蔵する機関が国内には存在しないので、研究の予備的作業として、資料の体系的および集中的な収集とその整理に取り組んだ。二次文献についても、ウェディングについての研究書・研究論文、両大戦間期プロレタリア児童文学に関する研究書・研究論文、旧東ドイツの社会主義児童文学に関する研究書・研究論文は、可能な限り多く収集することに努めた。いずれも主としてドイツ語文献を対象とした。

収集・整理された一次文献については、当然のことながら精読および分析 (テキスト内在解釈) を行った。ただし、ウェディングの数十年にわたる創作活動のすべて (全作品) に怠りなく目配りを行うことができたかと

いうと、必ずしもそうではない。時間的制約もあり、1930年代のプロレタリア児童文学時代の代表作（二作）、戦後中国を舞台にした作品、晩年の1960年代に取り組んだアフリカの寓話の翻案（二作）に絞り、それぞれの作品の特徴・傾向が、20世紀ベルリンのプロレタリア児童文学ないしは社会主義児童文学の各シーンにおいて、どのように位置付けられ、いかなる影響力を発揮したのか（あるいはしなかったのか）という観点から考察した。換言すると、ウェディングの代表作を、精緻な内在解釈の対象とする一方で、つねに社会主義児童文学史との関連を意識しながら読み込んだ、ということである。

その際に一点、狭義のテキスト内在解釈にとどまらず、もっと広い視野から取り組むことができた作品がある。彼女のデビュー作『エデとウンク』（1931）である。この作品の受容史は、発表された両大戦間期にとどまらず、戦後、1953年にウェディングが東ベルリンに戻って以降においてこそ、数奇な運命をたどることになる。東ドイツの学校教材に採用され（その結果、教科書版を含め、何度も版を改めることになる）、さらに1980年にはDEFAで映画化までされたのである。もっともドイツ再統一後は、ウェディングの受容史同様、この作品もまたすっかり忘れられてしまうことになるのだが、いずれにしても発表から映画化まで、あるいは1987年を最後に版が途絶え、2005年に再々版されるまで、実に半世紀以上にわたる『エデとウンク』の出版・受容史を追うことは、アレックス・ウェディングを中心にプロレタリア児童文学から社会主義児童文学に至る歴史の変遷の実態の解明を目指す本研究にとって、きわめて有意義であることが確認された。したがって本研究を円滑に遂行するため、ウェディングの作品分析（テキスト内在解釈）に加え、彼女のデビュー作『エデとウンク』については、その受容史の分析もまた不可欠であると見なし、原典としての文学作品と映画化作品との比較研究も研究方法として採用した。

#### 4. 研究成果

本研究によって得られた最大の成果は、これまで国内のドイツ文学・日本児童文学の世界で論じられることのなかったアレックス・ウェディングという作家研究の端緒が開かれたことである。研究代表者は、1930年代に始まり、1960年代に終わるこの作家の文学活動の軌跡を包括的に把握することで、彼女の文学的特性の変遷が、20世紀ベルリンの社会主義文学の進展と密接な関係にあることを突き止めた。以下、その点について概観する。

(1) ウェディングのデビュー作『エデとウンク』（1931）および『北極海は呼ぶ』（1936）は、プロレタリア児童文学期の作品に位置付

けられるが、同じマーリク社から出版された1920年代のプロレタリア革命童話に比べ、空想的要素が排除される代わりに、同時代の都市に生きる子どもの生活実態の描写が前面に押し出されている。その際、当時の人気児童文学者エーリヒ・ケストナー（Erich Kästner, 1899-1974）からの影響も色濃く見られる一方、ケストナーが得意とした中流市民階級の子どもではなく、むしろ労働者階級の子どもや都市の周縁部に生きるロマの子どもを中心に描いている点に（これらマイノリティに属する子どもたちの交流・連帯まで書き込んでいる点もまた見逃せない）、ヘルミュニア・ツア・ミューレン（Hermynia zur Mühlen, 1883-1951）らの初期のプロレタリア児童文学には見られなかった、社会主義リアリズム（児童）文学の萌芽が読み取れた。

(2) ナチスによる政権奪取後、パリ・ニューヨーク亡命を経て、ウェディングは1950年代初頭にチェコスロヴァキアの外交官である夫とともに北京に滞在する。その経験を踏まえて執筆された『鉄牛』（1952）では、いわゆるストリート・チルドレンの主人公が解放後の中国において社会主義教育を受け、成長していくさまを描いた。この作品が発表された直後、ウェディングは東ベルリンに移住することになる。そこでも彼女は中国の民話『龍の花嫁』（1953）を発表。ここにおいて誕生直後のドイツ民主共和国の児童文学に、同時代および過去の「中国」という要素を導入したことは、ウェディング個人の文学活動の広がりを示すと同時に、東ドイツの社会主義児童文学シーンの地平を切り拓いたという点でも、新たな展開が確認された。

(3) 1955年にF.C. ヴァイスコプフが死去すると、ウェディングはしばらくは亡夫の文学全集の編纂に従事するなど、自身の創作活動からは遠ざかる。しかし1960年代に入ると、立て続けにアフリカの寓話に基づいた作品を発表する。これは当時のアフリカ独立運動および冷戦下における社会主義陣営との連携強化（例えばガーナなど）という、東ドイツの政治的思惑に沿った形で展開された文学活動と考えられる。とはいえウェディングがアフリカの知られざる文学的遺産を、東ドイツの社会主義児童文学という文脈において積極的に紹介していた事実は、20世紀の世界文学的交流の一端が垣間見られるという意味で興味深い。

上述の通りウェディングは1950年代はじめに東ドイツ（東ベルリン）に移住したが、その後、彼女は中国およびアフリカに取材した新作を発表する一方、旧作、具体的には1930年代のデビュー作『エデとウンク』の受容史においても、東ドイツの社会主義児童文学史に多大な貢献を果たすことになる。すなわち、この作品は1954年から1985年にか

て 24 刷まで版を重ね、さらに 1972 年から 1987 年にかけては教科書版も発行（全部で 6 刷）そして 1980 年には映画化までされた。本研究では、両大戦間期に執筆・発表されたこの作品が、なぜ東ドイツにおいてかくも高く評価され続けたのか、という点に焦点を絞り、精読および分析を行なった。以下にその結果の概略を述べる。

(1) すでに述べた通り、黄金の 20 年代のベルリンを舞台にした児童文学『エデとウンク』にケストナーの影響を読み取ることは比較的容易な作業である。しかし本作とケストナーが決定的に異なるのは、ウェディングにはケストナーが描かなかつた労働者階級の子どもたちの生活実態が描かれている点、しかもその際、社会民主党支持者と共産党支持者の見解の相違という、革新陣営内における大人社会の対立の構図がそのまま子ども社会にも反映されている点であり、この傾向（写実的描写）はそれ以前のプロレタリア児童文学との相違としても重要であることが判明した。また、上述のふたつの陣営のうち、最終的には後者、共産党支持の家族の主張が支持される結末は、後年、本作が東ドイツにおいてほとんど書き換えられることなく出版された大きな理由のひとつとして考えられよう。このことは（児童）文学の政治的利用という、社会主義（児童）文学史を検討する上で避けて通れない課題との直面をも意味する。

(2) 本作のもうひとつの特徴は、ベルリンの周縁部に生きるロマの子どもおよびその家庭の非差別的な生活実態が克明に描写されている点である。ナチス体制下において、ユダヤ人のみならず、シンティ・ロマもまた大量虐殺の被害に遭ったことは、今日よく知られている。事実、この小説のモデルとなったロマの一家の大半は、のちにアウシュヴィッツで落命したと言われている。1950 年代以降、本作が東ドイツで読まれた際に、ロマの描写がどう受け止められたかについては、本研究期間中に解明することはできなかった。しかしながら、30 年代初頭の小説中に直接的な描写はないものの、後年の東ドイツでの再版に際し、ウェディングが書き足した「まえがき」での記述を踏まえてロマの「その後」を念頭に本文を読むと、彼らもまた本作が発表された後、ナチスの蛮行の被害者となったことは容易に想像できる。そんな彼らが共産主義の一家（父親および子ども）と連帯する本作は、やはり「反ナチ」を掲げた東ドイツにおいて政治的に利用されやすかつたものと考えられる。

以上が本研究によって得られた主な成果である。次にこれらの研究成果を発展させ、今後のさらなる研究に結び付ける展望について、簡単に述べたい。

本研究は 20 世紀ベルリンの社会主義文学シーンを包括的に捉えることを試みたが、その結果として判明したことは、1920 年代から 30 年代にかけてのいわゆる両大戦間期ベルリンにおいてこそ、さまざまな傾向を持った都市型児童文学が花開いたということである。すでに述べたところでは、ケストナーはもちろん、ウェディングやツア・ミューレンの名が挙げられよう。彼女たちが取り組んだ左翼系の児童文学は、当然のことながらケストナーとの差異を強調することに腐心したが（もっとも、それでも拭い去れないケストナーの影響の大きさについては、本研究で得られた成果のひとつとして言及した通りであるが）、他方、ケストナーの陰に隠れて、あるいはケストナーを先取りする形で、ワイマール共和国期の子どもを取り巻く生活・社会環境を描いた児童文学もまた、この時代には数多く存在した。しかもそれらはおしなべて同時代の大人社会に特徴的な傾向 戦争孤児および母子家庭の増加、プロレタリア革命運動の隆盛、都市の交通網の整備、外貨、とりわけ米ドル資本の流入、広告産業の成長などを反映したものである点は興味深い。本研究において活用すべく収集された文献を通してその事実を知るに至った本研究の研究代表者は、今後は（本研究とは異なり）イデオロギーの左右にとらわれることなく、「大人が作ったモダン都市の光と闇を、次世代の視座から照らす都市型児童文学」という観点から、両大戦間期ドイツ児童文学における都市ベルリンの表象研究を行う予定である。なお、この新たな研究課題は、平成 27 年度に基盤研究（C）として科研費の採択を受けている（課題番号 15K02411）。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 0 件）

〔学会発表〕（計 1 件）

佐藤 文彦、アレックス・ウェディングの『エデとウンク』（1931）について ―ケストナーの陰に隠れたベルリン児童文学の一側面―、大阪市立大学ドイツ文学会、2015 年 3 月 31 日、大阪市立大学（大阪府・大阪市）

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

佐藤 文彦（SATO, Fumihiko）

金沢大学・歴史言語文化学系・准教授

研究者番号：30452098